

---

# 魔不良冒険奇行 ~ 怪傑！ 超電磁砲編 ~

ヒロ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔不良冒険奇行 ～怪傑！ 超電磁砲編～

### 【Nコード】

N0596Z

### 【作者名】

ヒロ

### 【あらすじ】

「電撃！ 学園都市編」の第2部になります。テーマは「とある科学の超電磁砲」ですが、話を考えているとなかなかどうして超電磁っぽくならないものです。

～あらすじ～

学園都市に迷い込んだ天然種超能力少年を名乗るにはあまりに

も肉体派の不良少年・伊吹圭介が学園都市制覇を目論見、財布片手にフードコートを闊歩する！  
迸る胃液、唸る腹の音、消えゆく財布とその中身。  
ついに出来るのか超能力!?

次の日・朝 「5:00」 「1日、あなたたちのために体を張ってやる」

まさに奇跡である。

爆発炎上の食物連鎖で第一学区工業倉庫は玩具箱をひっくり返したような大騒ぎになったのは不幸中の幸いだったといえる。

現場の警察はこの上ないほど混乱し、圭介はバイクとグローブを回収、すたこらと逃げる事ができた。

おかげで徹夜でガラクタ同然のバイクを押す羽目になったのだが、残せば証拠になる。なにより思い出の品だ。無碍に扱うわけにもいかなかった。

すり傷切り傷は全身に及ぶものの五体満足で切り抜けられたのだ。あれだけの危機に瀕しておきながら。

まさに奇跡である。

それを象徴するかのような、清々しい朝焼けだ。

あの闇は晴れて小鳥はさえずり、周囲は傍の小川のせせらぎすら聞こえるほど物静か。パトランとはまったく無縁で 徹夜明けの圭介の横顔に、冷えたそよ風が鞭を打った。

「はあ……」

奇跡だなんだと並び立てたが、さすがの圭介も体力の底を見せてきた。

72時間程度は働ける自信があったのだが。極限的な連続タイムと逃走の緊迫3連コンボは伊達ではない。

ずるずるずるずる。

ずるずるずるずる。

爽やかな朝にバイクを引きずり圭介はひとり歩いていく。

警察と鉢合わせするのがイヤである手この手で迂回を敢行したのだが、道行く先にはATMもコンビニもない。人気はなく（逃げている身としてはありがたいのだが）、また車両の通りもない。

いい加減休みたい 狼狽した圭介がまたため息をつく。その先

で。

人影を見つけた。ふたり。身なりや背格好は似ていないふたりだ。向かい合っていて、口論という様子でもない。例えるなら道を聞いている風だ。さすがにあれは警察とは無関係だろう。

ついでに俺も道を聞こうか　急ごうにもバイクを引きずっている手前、なかなか歩調は早まらない。もどかしさと疲労感で苛立ちが強まっていく。

ふいに、向かい合っていたふたりが離れた。ひとりには奥に、ひとりには　傍のフェンスに手をかけた。

フェンスの向こうは小川だ。

この時期の川の水温が水浴びに適するかどうかは昨日体感した圭介でも判断に迷うところであるが、そもそもフェンスを越えてまで服を着たまま水場に入ろうとするのはおかしい。

怪訝に思いながらも圭介はフェンスに近付いていく。茶髪の少年が、どこか虚ろな目でフェンスを上りきり

「おっと」

ろうとしたところ、圭介に足首を掴まれた。

茶髪少年は無表情だ。いつそのままジーパン脱がしてもバレないような　と圭介は頭の隅で考える。

少年は圭介に逆らってフェンスを乗り越えようと無言で足を上げようと力を込める。圭介は嘆息して、

「でりゃ」

特別力を加えず、しかし全身の瞬発力を利用して、一発、フェンスから少年を引っっこ抜いた。

抜いた手前、抱きかかえてもよかったのだが　力負けした上に優しく抱かれたらプライドも傷付くだろう　珍しく相手のことを考えて、あえて宙空に投げっぱなしした。

圭介の傍に少年は落下した。

うつ伏せに。

顔面から。

アスファルトに。

傍から見て、かなり危険な落ち方である。受け身くらい取るものと思っていたが。

「っ痛エな！ 痛エよ！ 痛いじゃねエかよ！」

「お、おう。悪い」

起き上がった少年の剣幕に、思わず圭介は身じろいだ。今までの無感情が嘘のようだ。

「てめえ、この浜面仕上だと知つての狼藉か、ああっ！？」

「はまづら……？ あー、もしかしてそれあんたのこと？」

「がああああっ！ 喧嘩売ってんのかてめえ！ 売ってんだよな！」

「やだよメンドクせー。あんた弱そうだし」

「んだとゴラァ！」

ドスの利いた声で浜面仕上は拳を振り上げた。

圭介は肩をすくめ かしなんだかんだで拳を固めるあたり、この男も好きものである。

浜面仕上がお返しとばかりに左から顔面を狙った。

体さばきは場慣れしているようで躊躇いこそないが いかんせん精練されていない。隙も大きく読みやすい拳だ。上体を後ろに逸らし、余裕を持って圭介はこれを避けた。

続く浜面の二打目。これも顔面狙いの右。しかし先の左よりも踏み込みが深い。

圭介の上体は戻っていない。逸らすだけでは避けられない。当たる。

「でいりゃ」

気の抜けた掛け声とともに圭介は右腕を伸ばした。

それは強く殴りつけるつもりで大きく振りかぶっていた浜面の右よりも、遙かに素早く浜面の顔面を捉えた。

自分の深い踏み込みの勢いをモロに受け、浜面は軽く吹き飛んだ。

「こ……の……！」

「あーあ、鼻ピアスなんかしてっから無駄に痛いだろ。……ま、そ

「つちは吹き飛ばなかつたみたいでなにより」

涙を溜めて顔を押しさえ、浜面は圭介を睨みつけた。圭介が昨日相手取った“殺意”とはまた毛色が違う視線だ。

形容するなら、これは“卑屈”だろう。

「やれやれだぜ」

固めた拳をほどき、圭介は甚だ呆れてみせる。

思い切りの良さや反骨精神は評価できるが、酷く性格が歪んでいる。もつとも、それも昨日の相手には及ばないが。

それだけに残念だ。決意と誇りを持つようになれば、本気で殴るに値する男になれると思うのだが。

このまま流れで殴り倒しても、昨日以上の空虚で胸が満たされることは目に見えていた。

ただのチンピラをただ殴るのは、さすがにもう飽きている。

圭介は煮え切らない気分を吐きだそうと嘆息して　はたりと思いついた。

浜面は見たところ不良である。

不良とは　少なくとも圭介の常識では派手なものが好きだ。だからきつとバイクをいじくる。ならば圭介のバイクを直す算段も立てられるのではあるまいか　？

そう考えて、圭介は切り出した。

「あなたのヘッドはどこにいる？」

「はあ？　お前なに言ってる？」

「案内しろ。すぐに」

「ふっ、ふざけんなよ。んなこと」

「やらないなら……わかるよなあ？　浜面くん？」

先ほど叩きつけた右拳を攻撃的にちらつかせ、浜面の反応を伺った。生唾を飲み込み目を見開く　怖じ気づいているのは間違いない。

後はこちら言えばいいはずだ。圭介の経験的に。

「安心しろ。　悪いようにはしねーぜ」

悪いようにはしない。  
果たして不良にそんなことを言われて納得する人間がどれほどいるだろう。

しかしながら経験的に、圭介は百発百中であつた。

単純な人となりの人が人を信じさせるのか、はたまた暴力が人の恐怖心をえぐるのか。それは、圭介自身の預かり知らぬところである。

\* \* \*

「廃ビルね。なかなかいいアジトだ。俺好み」

「そりゃどうも」

浜面はふてくされたように両手をジャージのポケットに隠して、圭介の2段先を登る。

先導されて行き着いたのは3階。だだっ広いフロアだった。隅には埃を被つて雑多に物が陳列されており、さながら貧困街の露天商通りを思わせた。

その雑貨のひとつ　ソファーにもたれて、男達がじつと圭介を見つめていた。敵意が2割、好奇心が残りといった視線だ。

一度、圭介は自身に目を向けなおした。

ポロポロのジャケットに切り傷や火傷だらけの全身。浜面も顔が腫れているが、どう見ても圭介の方が重傷である。

こんな人間に畏怖する不良もそういない。

「あんたらの誰が浜面のヘッドだ？」

「俺だ」

言つて、一際巨漢が腰を上げた。圭介を悠然と見下ろして、ゆっくりと言葉を続ける。

「駒場利徳だ。一帯のチンピラは俺がシメてる。何の用件だ」

「俺のバイク直してくれないか」

なにもひねらず、圭介は用件を口にした。駒場利徳は眉をひそめて腕を組む。

「本当は自分でやりたいとこだが、生憎時間がない。頼む」

「期日は？」

「今日含めて2日。滞在ビザがそれしか取れんでな」

「ブツは？」

「おもて」

駒場利徳は舎弟らしい不良に目配せした。舎弟は一目散に窓辺まで走り、首を突っ込んで外を見下ろす。

「ゴミしかねっす」

「だそうだ」

「持ち主の俺が言うのもなんだが、確かにゴミだな」

圭介は苦笑を浮かべ、ふいにそれは、柔らかな微笑に変わっていった。

遠い昔のことを話しているようだった。

刻一刻とあの日の暴風に巻かれていく記憶の砂塵。けれどもあの想いだけは決して色あせない。

あの濃密な時間が、夢と誇りを魂に刻みつけているのだ。

「先代から譲ってもらったモンでね。俺が峠の風になるまで捨てちゃいけねーんだとよ」

今回は風は風でも爆風である。

豪快ながら妥協を許さない先代のことだ。会うが一番、圭介から事の顛末を聞き出すだろう。

想像してみる。

よう圭。それでどうした？

喧嘩した拍子に爆発したっす。はい。

はっはっはっ！……少し、頭冷やそうか。

……これ以上は無理だ。

恐怖する。骨身が凍りつく思いだった。

超能力者を出し抜いて殴り倒す圭介をして、先代は化け物・鬼・

悪魔と形容して然るべき人物だった。

勝つには相応の覚悟をしなければならぬ。腕が千切れるか目を抉られるか。死ぬ一歩手前まで追い詰められることだけは間違いない。

「しかしお前はゴミだと言う」

駒場利徳は抑揚なく事実を確認する。

甚だしく厳しい現実に、圭介はムスツとした表情で首を縦に振った。

「ゴミをバイクに、2日で直せとも言う」

「無理なのかよ学園都市様でもよう」

「可能だ。ただし相応の設備と金と労力が必要。それだけの価値がお前にあるのか？」

駒場利徳はじつと圭介を見据えている。

圭介はその意味を察していた。

試している。見極めようとしている。

この伊吹圭介を、値踏みしているのだ。

圭介は強く笑った。口端を吊り上げ、歯牙を光らせる。

胸を張ってふんぞり返り、左手の親指を立てて自分に突き刺した。

「真つ当な手段で稼いだ金が70万、加えて俺の命1日分」

「命？」

「1日、あなたたちのために体を張ってやる。言われりゃ世紀末霸王だつてぶつ潰すし、財宝だつてかき集める。ただし1日だ」

淀みない目をまっすぐ返した。ガンの飛ばし合い　と言うにはいささか敵意や攻撃性といった“悪意”がなりを潜めているもの、しかし好意的な見つけ合いのそれとはまったく性質が違う。

駒場も圭介も、決して視線は逸らさない。

「抜かすな、お前。いい自信だ。名前は」

「伊吹圭介」

言い放つも、しかし周囲の反応は薄い。けつ、と圭介は悪態をついた。学園都市という閉鎖空間では外の情報は入りにくいのかもし

れないが。

だとしても面白くない。外の不良に言えば「北陸最強の雷衝くらイトニングスマツシュ>3代目総長」として逃げていくものだ。もつとも、口走る“伝説”はたいてい尾びれが付いているものなのだが。

駒場は微動だにしない。なにも漏らさず、まったく動じず、ただ圭介をにらみ続ける。

言葉をいくつか交わしたにもかかわらず、場の緊迫感が一向に変わらない。異様な空気だった。

ざわめいていた取り巻きが次第に言葉数を減らしていった。圭介と駒場はいつしか手をだらんと下ろしたまま、互いに睨み合い続け

ふいに、駒場が動いた。

巨体に似合わぬ細やかな足運びからスタンスを取り 途端、右拳が圭介の顔面に迫る。

速すぎる。

避けられない ツ？

硬い拳が圭介の眉間を捉えた。勢いそのままに拳は振り切られる。圭介の体は軽くのけ反り、背後に大きく吹き飛んだ。数メートルを滑空し しかし倒れず、踏みとどまった。

咄嗟のバックステップが上手く威力を緩和してくれたのだ。

もつとも、軽く頭がグラグラするのは致し方ない。まともに食らえば、首から上がなくなってもおかしくなかったかもしれないのどの威力なのだ。

驚愕する駒場の間隙について、圭介は体勢を立て直した。肺に思い切り空気を取り込み、拳を固めた。

駒場の身体能力は異常だ。

素で壁走りを敢行できる圭介をして、そう思わせるほどに。

その異常能力が何かしらのドーピングか機械に頼っているのかは知ったことではない。

昨晚相手にした異能者とは根本的に違う部分がある。

駒場の能力は強い者を相手にするためのものだ。一瞬だが、拳動から圭介にはそれが感じ取れた。

手の内を晒さない。油断をしない。そして相手の拳動に対して神経質だ。

異能者犇めく学園都市で戦うために付いた癖だろう。弱者が強者を制するための癖。生き残るための戦略。

圭介は内心で肩をすくめた。圭介の喧嘩殺法の要は卓越した見切りと身体能力だ。

インファイト勝負は願ってもないが、技術はどいつとして、身体能力はおそらく凌駕されている。先の動きはほぼ見えなかった。

集中しろ。

圭介は呼吸の線を細めていく。

見切れなければ。でなくては勝てない。

見切る。勝つ　奥歯を噛み締め、体を低く沈ませた。

「終いだ」

急に駒場は拳を解いた。目に見えて戦意がしぼんでいく。

圭介は一応、数秒構えを解かず、注意深く様子を窺い　本当に戦う気がないことを確信した。

拳を下ろし、圭介は大きいため息をついた。

「勝手に始めて勝手に終わりつてな。なんつーか。こうムカムカするぜ」

「非礼は詫びる。だが依頼に足る力量だ」

ジャケットの乱れを直すように裾をはたき、駒場は圭介に改めて目を向けた。

圭介もこれで、駒場と同じく血の気の多い不良を束ねていた男である。仕掛けてきた理由が単なる力試しだけでないことは察しがついた。

見ず知らずを何の理由もなく迎え入れることに反発する人間は少なくない。示しがつかないためだ。

だから、チームをまとめる頭ははじめをつけなければならぬ。それは面接だったり課題だったり。チームによってまちまちだ。どうやら 圭介は額に手をあてる。血が少しにじみ出ている。今回の場合は“ゲンコー発”のようだ。

「では、バイク修理を請け負うに代わり、仕事を頼みたい」  
かくして駒場は口火を切り。

伊吹圭介の学園都市2日目が始まった。

次の日・昼 「10:00」 「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけど」

劇的な体験が続いていたのでつい忘れていた。

圭介はスキルアウトから貰った消費期限切れの弁当をつついて失ったエネルギーを補充して疲労感を吹き飛ばし、ふとそのことを思い出した。

ここは学園都市。学校と勉強の街。ならば当然な話である。

昼間の街には人が極端に少ないのだ。なるほど確かに、これでは血の気の多い不良学生もすぐ目について補導されてしまう。

駒場利徳の依頼の意味が少しずつ、圭介にも理解できてきた。

「んじゃ、俺はここで」

補導されちゃかなわねーからな、とここまで案内してきた浜面が足を止めた。

圭介は振り返り、割り箸を握った手を軽く振ってみせる。

「俺のバイク、よろしく！」

「うっせえ。あんたこそ俺らの財布取り返して来い」

「任せる。豪華客船に乗ったつもりでいるんだな」

「……冰山にぶつかる奴じゃないだろうな？」

「は？ 船って山にぶつかるのか？」

「駄目だこいつ」

浜面は深くため息をついて踵を返した。振り返りもしないその背中の中は なぜだか少し、煤けてみえた。

あいつもあれで苦労してんのな、と勝手に結論付けて、圭介は弁当に残った漬け物を口に運んだ。歯ごたえのある食感を楽しみつつ、視線を伸ばす。

駒場利徳が圭介に課した仕事 あるいは依頼は、至極簡潔なものだった。

ある男を見つけて出してボコボコにしる。完膚なきまでに。一通りの事のあらましも聞いている。なんでも最近、駒場のチ

ームの人間が財布を盗まれているらしい。スキルアウトと呼ばれる彼らは異能を持たず、真つ当な学生生活を送っていないので警備員や風紀委員を頼るわけにもいかない。

上手く出し抜かれてカモにされているのだ。このままでは喧嘩っ早い不良達が見境なしに一般学生を殴り倒しかねない。

要は、緊迫した現状を打破したい、ということだ。そのためには、昼夜問わずに行動できる圭介は都合のいい人材なのだという。

もちろん駒場も1日で圭介が犯人を見つけられるとは考えていない。

ただ、自分達の捜査と別の切り口から情報を集めることで、事態が変化するのではないかと考えているようである。

とにかく犯人を今日1日で挙げられれば最強、とだけ圭介は理解していた(“最強”はどうかとして、その判断はひとまず間違っていない)。

喧嘩の時の神懸かり的な見切りと直感さえ生かせれば瞬殺だ。しかしそれらは、勘や運頼みに過ぎない。

おまけにこれで、圭介はくじ運が悪い。分の悪い賭けが嫌いでないことも理由のひとつであるが、人を直に相手取らなければ勘も相当鈍くなってしまうのも原因の一つのようだ。

見つけられない。勘だけでは。それは理解していた。

然るに圭介の取れる手段は、ただひとつに絞られていた。

“足で稼ぐ”。古風だが堅実な方法のほずだ。

元々の“ロボット討伐”の仕事もあるのだ。聞き込み自体は強いられていたことであるし、併せての情報集めはそう苦でもないだろう。

やることは決まった。

最寄りのゴミ箱に弁当容器を投げ捨てて、圭介は無造作に口を拭いた。

ひとまず向かうのは　そう、ATMだ。

\* \* \*

学園都市。学校と勉強の街。学生の街。

学生が金を手に入れて、やることはなんだろうか？

ATMから引き出したおかげで重くなった財布をポケットの存在感を意識して、圭介なりに頭を働かせる。

まず服だ。こうボロでは目立ってしまう。

次にバイクだ。メカは男のロマンである。

ビデオはどうだ。この間のタイトルマッチは見ていて体中の血液が湧き上がるようだった。

雑誌もいい。絵付きの技の解説は映像に劣るが勉強になる。

遊ぶ金にも消える。ゲームセンターのフライトシミュレーションゲームは目が回りそうなほどリアルだ。敵機とのドッグファイトは平衡感覚を失いかねない臨場感に熱くなる。

残るは食事だ。グルメ探求に終わりはない。

などの独自の理論を展開し、金を手に入れた圭介は意気揚々と開店直後のショッピングモールへと遊びに　もとい、捜査に繰り出した。

\* \* \*

服屋で店員を呼び止めて聞き込み、新しいレザージャケットを三割引きに値下げさせ、モーターショップではディーラーと熱心に秋

モデルに搭載されるエンジンのデリケートさについて語り合い、ビデオシヨップでは難解なサスペンス映画を熱っぽく勧めるカウンターのバイトから逃げ出して。

いかん。これはいかん。

さすがの圭介も雑念を払いのけようと頭を軽く振って、目の前の雑誌に手を伸ばす。このままでは全ての店を1日で回りきれない。流し読んだ“週刊男のミリオネア”を棚に戻し、今度は“ウィークリーガンマー”を開いてみる。

目次に“ドラマ的世代交代……ワールドタイトル争奪戦線徹底解剖”と見つけ、巻頭記事に注目する。

その瞬間。というにはいささか語弊がある。今日はこの以前にも数度、この“瞬間”に出会っている。

悪寒だ。冷たく、しかし陰湿な感覚はない。明確な殺意のにおいてはまた違う。武器を構えていないようだ。

雑誌から目を離し、遙か向こうを注視する。

向かいのビルの端。ギリギリ覗くことができる位置。目を細め、逆光に隠されたガラスの奥を透かし見る。

不意に、肩を叩かれた。

雑誌を閉じて振り返る。途端に顔を無造作にハタキで叩かれた。

「立ち読みはご遠慮願えますか」

「……さーせん」

潔く謝って、圭介は閉じた雑誌を精算して店を出る。脇に雑誌を抱え、向かいのビルを見上げた。

さて、どうしよう。

ひとまず近場のゲームセンターを探し、歩道に沿って歩いていく。思いのほか隣の車道には乗用車が走っていた。

技術漏洩を防ぐため学園都市内に一通りのプラントを揃えているせいだろ。学生が多いのはもちろんだが、決してそれ以外の一般人が住んでいない訳ではないのだ。

バイクさえあればすぐに移動できるんだが。　ぼやいてようやく、

圭介はバイク修理の交換条件にいて思い出した。とはいえ、やることは変わらないのだが。

何気なく視界を広げ、傍から見れば機嫌悪く周囲にガンを飛ばしながらゲームセンターを探す。ものの、圭介の目はどこか虚ろでいた。心ここにあらず、といった風体だ。

バイクに乗りたい。すつきりしない気分が晴れてくれるような気がしたのだ。

面白くない。なかなか刺激的な体験が続くものだからつい忘れがちになるのだが、面白くないことも少なくない。昨晚の倉庫の喧嘩も、今朝のじゃれあいもだ。

拳を振り回すのは大好きなはずなのに、ここに来てからは随分と面白くない。わけのわからない理屈をゴネられたり、不完全燃焼に止められたり。

やはり好き好んで学校と勉強の街に来るようなインテリの考えはわからん。

嘆息して、圭介はふと視線を留めた。近付いてくる。人だ。

長髪を後ろでまとめた女で、どうやら年上。動きやすそうなジャージで身を固めている。

立ち振る舞いから、相応に“できる”部類の人間だろうと直感する。

「ちょっといいじゃん？」

「あー？　すげーじゃん」　胸が、とは敢えて言わない。

「はあ？　……とにかくここぞでなにしてるじゃん」

「ぶらついてるんすけど」

「学校は？」

「あんなもんに喜んで行くナリに見えるかよ」

一瞬、圭介の脳裏を映像がよぎった。

おぞましい記憶だ。

箱詰めの世界の思い出。黒い板に難解な文字がズラズラ並び、それは手元の本にまで及んで脳髓を破壊せんと五感に襲いかかっ

「あんなトコ行くかああ！」

つい、語尾に力がこもってしまった。

「ほほう。剛毅じゃん」ジャージ女は眉をひそめた。「ちよっと向こうまで来てもらうじゃん。みっちり指導してやんじゃん？」

「しっ……シドー？」

しどう。死道……っ!?

まさかこの女、特殊な拳法か暗殺術の使い手なのか？ またよくわからん理由で喧嘩ふっかけられているのか？

思わず体に力が入り、身構えて拳なぞを握ってしまう。臨戦態勢。ジャージ女は口端を上げた。

「やる気じゃん？ まあ、私はそういう威勢いいの、嫌いじゃないけどね」

「けっ」

死なば諸共。毒を食らわば皿まで。オーバーヒートまでアクセル全開。

今更どころできない状況だ。どうせ倒してもまたイヤな気分になるのだろうが、背に腹は変えられない。

せめて、スッキリしてからイヤな気分になってやる。

意を決する。圭介は足で歩道にすり合わせ、未だに雑誌を脇に置いたまま、固めた左拳を上げる。

ジャージ女は身を屈めた。特有の緊迫感が周囲に広がり。

「あっ、おにーちゃん！」

ふいに圭介の腕が絡み取られた。

「すみません。おにいちゃんってば口下手で。私たち、転校の下見に来たんです。でもおにいちゃん、学校より街並みに興味があるって勝手に」

まさに殴り合おうとしていた瞬間に言葉をマシンガンのように乱れ撃たれ、ジャージ女も圭介も、呆然と目を丸くした。

否、圭介が呆けた理由はジャージ女とは少し違っていた。

見覚えがあったのだ。彼女の銀色の髪に。

「ほら、いくよおにいちゃん？」

質問を投げる前に左腕を引っ張り 明らかに体格の勝る圭介を文字通り引きずるほどの力で ジャージ女の手から抜き出した。虚を衝かれたためか興が殺がれたのか、ジャージ女は追ってこない。だがそれでも、圭介の腕を引くことを止めない。

「なんのつもりだ」

「意味が不明瞭なため返答できません」

機械的に、丁寧に聞き取りやすく抑揚のない声が返ってきた。

一連の流れを体感しておいてなんだが 喋れるのか、こいつ。

「あんた、俺をどこに連れて行く気なんだ？」

「目的地を指定してください。お連れします」

「あー？ ならゲーセンとか」

「ゲームセンターという認識でよろしいでしょうか？」

「お、おう」

「了解しました。検索します。検索完了しました」

「早っ！ 凄いなあんた」

「こちらです」

ぐい、とまた尋常ならざる力で引っ張られた。無駄に抵抗すれば片腕を持って行かれると直感し、大人しくこれに従った。

迷いのない誘導に足向きを任せ、圭介はじつと腕に抱きつく銀髪を観察した。

落ちて着いた碧い瞳に白い肌。それらは一見して欧州貴族の令嬢を思わせた。

しかし優美な四肢を隠すのは平々凡々なセーラー服で、耳元には正にプロ用といった風のヘッドホンらしきものをはめている。

なにより長身の部類に入る圭介を悠然と連れ歩く立ち振る舞いは非常にパワフルである。これでは中学女子格闘家の印象を与えかねない。

もちろん、圭介はこの銀髪がそんな規格に収まりきる戦闘能力でないことを知っていた。

なにせこれは、圭介に巻きつくこの腕を無骨なガトリングに変形し、情け容赦なく冷酷に命を獲りに来るメタルヒットマンなのだ。ターミネーターと言ってもいい。

今の圭介なら、“そいつは未来からお前を殺しに来た殺人口ボットだ”と言われたらその瞬間に信じただろう。

「おい」

無反応。

今更ながら　まさかこいつ、人気のない所に連れて行ってゼロ距離から蜂の巣にする気じゃ　絶望感が圭介に襲いかかった。

腕を捨てる覚悟で逃げるにしても、土地勘がないこの学園都市では逃げ切れない。

片腕では昨日のように迎撃も十分にできないかもしれない。

結局、従うと決めてしまったのだ。最後まで従うしかない。

せいぜい祈るか、と圭介は深くため息をついた。

「あつ……と。たしか、けいすけさん？」

ふいに呼ばれて、圭介は半目を向けた。また見覚えのある花畑である。

いよいよ年貢の納め時か、と少しだけ考える。もちろん、それは決して肯定できるものではないのが。

「っおおー……？　昨日の花の子」

圭介は足を止める。花畑を頭に飾り付けたセーラー服の女の子が手を振っていた。隣にも髪の毛の長い、同じセーラー服の女の子が付いている。ほどほど今日はセーラー服に縁があるようだ。

「はい、昨日は……って、花の子って意味ですかあ!？」

「悪い。借りと貸しのある顔は覚えてるんだけどよ。名前はイマイチでさ」

頬を紅潮させて頭を押さえた花の子に、圭介は素直に詫びを入れた。

花の子は不満げに圭介を見据えたが、すぐに「まあいいですよ」と話題を切り上げた。その意を汲んで、圭介も違う話を振る。

「さつきサツでもないのに職質されたんだが、もう下校なのか？」  
「あー、大覇聖祭前ですからね。少しいつもより警備が厳重になっているんだと思います。学生は準備もあるので、私たちの学校は早めに終わりにになりました」

「午前だけか……そういや、昼間に帰るのってテンション上がったもんだっけ。いや懐かしい」

「そうですね。それ、私もわかります」

子供っぽく笑う圭介に花の子のお供は、ずい、と身を前にして賛同した。長い髪が揺れ、肩を抜けて地面に垂れる。

「去年なんか、弟と一緒に下校しました。どういいうわけか、帰る前にお弁当持たされて」

「おおーっ。話せるな嬢ちゃん。あんたも花の子とまとめて奢ってやろっ」

「いいんですか？」

「何度も聞くなら奢んねーぜ」

「ところで」

花の子がひよつと背伸びして、圭介の体の影に視線を向けた。

いつの間にか隠れていたようだ。普段周囲の気配で行動を判別する癖がある圭介には、どうも動向を掴みにくい。

「そちらの女の子はどなたですか？」

「ああ、こい」

体の影に自らも目を向けた瞬間、腕が常軌を逸した圧迫感に襲われた。

肉を貫く一歩手前で硬直する鋼鉄の指。押しつけられた妖美なボディ。伝わる人並みの体温が逆に恐怖を刻み込む。

これは警告だ。バカな圭介にもわかりやすい肉体言語。

口をしつかりと閉ざして最善の一手を探し求めるも、やはり見つからずにただただ嫌な汗を垂れ流した。

「もお、にいにったら。はずかしがっちゃってえ〜」

こいつなんか呼び方変えやがったマジ意味わかんねーぞ、と言う

ツッコミを呑み込みざるを得なかった。下手を打てばギャラリーの前で片腕四散というグロテスクな絵を見せつけかねない。

「私、このとおりにいの妹。ニルフていいいます。よろしくね」

どう見たら妹なのか誰か教えてくれ。

ニルフと名乗った自称妹は甘ったるい声で鳴いて、ふわふわした銀髪を圭介に擦り付かせた。甘い香りが鼻につく。昔嗅いだ覚えのある匂いだ。

花の子はニルフの自己紹介に笑顔で応え、お供の嬢ちゃんは意外そうに首を傾げつつも花の子に倣う。

明るく可憐な彼女達の振る舞いをよそに、圭介はさり気なく頬の冷や汗を拭った。

これで身の安全が保障されていれば、最高なものな。これ。

圭介の意を理解できる人間は、残念なことにその場にはいなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0596z/>

---

魔不良冒険奇行 ~ 怪傑！ 超電磁砲編 ~

2011年12月6日05時48分発行